

優 秀

— 第一部門 —

いのちについて

戸<sup>と</sup>

谷<sup>や</sup>

百<sup>も</sup>

花<sup>か</sup>



できるわけと、たまたまさんしたいことがあるの  
 で、たまたまよくいふとついにしめさる。ま  
 えんがいたるにたたく。たまたましめさる。ま  
 えん、とまたまがたたくしめさる。たまたま  
 たまたまえんをたたく。たまたま。たまたま。ま  
 えん。たまたま。たまたま。たまたま。たまたま。ま  
 えん。

たまたま。たまたま。たまたま。たまたま。たまたま。ま  
 えん。たまたま。たまたま。たまたま。たまたま。ま  
 えん。たまたま。たまたま。たまたま。たまたま。ま  
 えん。たまたま。たまたま。たまたま。たまたま。ま  
 えん。

たまたま。たまたま。たまたま。たまたま。たまたま。ま  
 えん。たまたま。たまたま。たまたま。たまたま。ま  
 えん。たまたま。たまたま。たまたま。たまたま。ま  
 えん。

たまたま。たまたま。たまたま。たまたま。たまたま。ま  
 えん。たまたま。たまたま。たまたま。たまたま。ま  
 えん。たまたま。たまたま。たまたま。たまたま。ま  
 えん。

たまたま。たまたま。たまたま。たまたま。たまたま。ま  
 えん。たまたま。たまたま。たまたま。たまたま。ま  
 えん。たまたま。たまたま。たまたま。たまたま。ま  
 えん。

ず、とがんとおいていたことばをたくさんかき  
取した。これに気が付いて、とがんとずくとなく  
さんことばをかんがえていました。

つたんとずくと、くちをって、なけれど、うれ  
しいとまゆかひにし、きもちをおぼすのなすど  
いづかかんがえていました。

づ、とちいさ、ことばにじょうどうでまいたる  
たをたのすまど、おたまたのなかどうたって、  
ました。このなかにあかさんとあかどうた  
づ、とちいさ、ことばにじょうどうでまいたる

たけまことで、わたしのきか、たけま  
したのしとたけまことばにじょうどうでま  
たくさんのなかにたすけられおぼすのなすど  
たので、かんしやとこのばんじょうがたけま  
せたいとあか、とちいさ。

わたしのようにはたけまのなかにたすけられ  
わたしのよりにじかたけまなとたけまさん  
るたけまのなかに、そのなとたけまがたけま  
にたけま、たけまのなかにたけまのなかに  
ます。



わたしのいのちには、そのいのちの光がある  
わりの光。  
そのいのちの光は、わたしの光。

いのちについて

戸谷 百花

いのちについてかきます。

わたしは、23さいになりました。

4さいでびょうきのために、ねたきりになりました。それまではあるけないけれど、かぞくにはわかってもらえることばをはなしていましたが、びょうきでこきゅうがわるくなつて、きかんせつかいをしたのでこえがでなくなりました。

ごはんはいろいろからですが、くちからもすこしたべます。ごえんをしないしゅじゅつをしたのでたべられますが、たくさんはつかれるのですこしだけです。

ごはんがらくになつたぶん、いまはいろんなことができます。

たいりよくがないので、じやえをかくときはくちからはたべません。たべるときは、えをかくことはしません。これはわたしがじぶんできめました。たくさんしたいことがあるので、たいりよくはひとつにしかもちません。えをかいなら2かくらいなものもしたくありません。とてもつかれてしまうからです。

それでもえをかくのはだいきです。

これは3ねんくらいまえにかくことをしました。

5ねんまえにじがかけることがわかってから、かあさんがかいじよのれんしゅうをしてくれて、じをいえですきなときにかけるようになりました。しをずっとかいています。

そのあとで、かいじよがあるときぶんがかいていないとおもわれるかもしれないと、スプリングバランサーというそうぐをつけて、ひとりでかくれんしゅうをしました。そのとちゅうでえもかけることがわかって、えもかくようになりました。

ずっとねたきりだったわたしは、じぶんどうごさせることをしてからは、せかいがかわりました。

ずっとかんがえていたことはたくさんかきました。これはかけないときからずっとたくさんことばをかんがえていました。

つたえられないとおもっていたけれど、うれしいときやかなしいきもちをあたまのなかでいつもかんがえています。

ずっとちいさいときにびょうどうできたいうたもだいすきで、あたまのなかでうたっていました。これはいまかあさんにおふるでうたってもらっています。

かけることで、わたしのいきがいをみつめました。しとえをかくことがいきがいです。

たくさんのひとにたすけられながらいきてきたので、かんしゃとこのげんきなすがたをみせたいとおもっています。



わたしのようにねたきりのひとのなかにも、わたしのようにじがかけるひとはたくさんいるとおもうので、そのひとたちがかけるようになるきつかけになるとよいとおもっています。

なんどもしにそうになりましたが、いのちがたすかったのは、きつとなにかすべきことがあったのだといまはおもっています、きつとこのことがそれなんだろうとかんがえています。

ずっとにゆういんしていて、なんにんもなくなるのをみて、とてもかなしかったしこわかったです。じぶんもしぬのかとおもったこともあったし、そんなきもちもつたえられずにいました。

こんなふうにかいてつたえられるようになってからは、ひとりでふあんになることはありません。つらいときやくるしいことはつたえてきづいてももらえるので、とてもこころづよいです。

うまくつたえられるか、ふあんもあります、ことばがだせなかったときにくらべればたいしたことではありません。

これからもたくさんのひとと、つたえることのたいせつなことばでコミュニケーションをとっていききたいです。

わたしのいのちについては、これでおわりです。

ありがとうございます。

戸谷百花

一九九八年生まれ 埼玉県在住



【受賞のことば】

ゆうしゆうしょうをありがとうございます。

うれしいです。

たくさんのひとにしろってもらって、たくさんのひとがつたえられるようになってくれるとうれしいです。

ここでこのようにつたえることができ、ほんとうにしあわせです。

これからもいきがいをわすれずに、たくさんのひとにつたえていきたいです。

ありがとうございます。

選評

きょうも私は目覚ましで起き、ラジオを聴きながら朝食を摂り、電車で職場に着いた。その間、いのちについて考えることはない。でも何度も死の淵をさまよった作者は毎日、いのちの意味を二十三年間ベッドの上で考え続けたのだろう。そしてその思考は、自身だけでなく、周りの人々や同じ境遇の人たちへの感謝や思いやりにつながっていく。ことばや絵で自分の気持ちを伝えられる喜びに満ちている。いのちの叫びに圧倒される作品だ。

(鈴木 賢一)